



世界の中の慶應義塾

ーでは、慶應義塾はグローバルな時代に、どう歩んでいくべきなのでしょう。

安西 福澤精神を礎にすることに変わりはありません。慶應義塾の精神面での大きな支柱は、「独立自尊」です。「独立自尊の人」が今ほど強く求められている時代はないと思います。そして今後ますます必要とされるに違いありません。ですから、そうした人間を改めて世に送り出していきたいですね。ちなみに独立自尊の人とは、自分を卑しめず人を卑しめない、そして他からいろいろと言われたからといって、直ぐに信念を曲げたり揺らいだりしない人のことです。

また一方で、これは慶應独自の新しい言葉なのですが、「協生」（きょうせい）も大切な時代だと感じています。少子高齢化の日本では、世代間のギャップを克服して、協調していくことが求められます。また国際社会の中では、国家間・民族間のギャップを克服して、対話を通して平和と安定的な発展を実現していくことが肝要です。このように、今ほどさまざまな人々が互いに理解し合い、協力し合うことが必要な時代はありません。

独立自尊の人間同士が、世代や民族が協力して生きる時代を創造していく。慶應義塾はまさにその先導者でありたいですね。

植村 「独立」と「協生」は一見相反しているようですが、実はそうした複眼的思想がとても大事なことだと思います。いろいろな矛盾や対立点が巨大化している今日、単眼的な発想では何も解決できないでしょう。その意味では学力と実力をしっかり身につける一方で、

実業と連携して、想像力と創造力を育むオープン＆オーバル（※1）の思想が大切ですね。

安西 おっしゃる通りです。独立とは自分を確立しつつ、自分も他人も卑しめない点が大事なのであり、社会の中で生きている以上は相手を信頼し、そのうえでコミュニケーションをとることも大切でしょう。これら自律と他者との関係性という両方を併せ持つことが非常に大事な時代になってきています。

植村 そういう意味で、私は企業人ですが、企業としても、そうした矛盾を克服できる能力を身につけた人材がほしいのです。こうした能力はぜひ塾生に持ってもらいたいですね。昨今、問題を「解説」する能力に長けた人が多いように思えますが、解説してもらっても何も解決しない。これからは「解決型」の人材が必要です。実力を身につけながら、幅広い想像力・協調力・視野をもったオーバルな解決力のある人間を育てる。そこに慶應義塾の良さがあると思いますし、それを期待したいですね。

10年後の日本・世界のために 連合三田会初の記念出版

ー今回、連合三田会大会初の記念出版をされるそうですね？

植村 先ほど今大会の目的の一つとして「発信の場」と申し上げましたが、三田会が組織としてこれだけの人を動員するからには、後世に残すかたちで何か発信したい、そう考えたのが始まりでした。そこで、各界で活躍する塾員の方に、「10年後の日本はこうすれば良くなる」という提言をしていただき、それを一冊の本にまとめて発信す

ることにしました（※2）。それが何らかの社会に対する影響力となって、より明るい未来が開けたら、と期待しています。

ほんの数年ぐらい前までは日本は世界から、「ルック・イースト」と言われ、手本とされてきました。勉学に勤しみ、秩序を尊び、活力に富むという点で、アジアを中心に非常に尊敬されていました。ところが今では、日本は反面教師の材料として見られている。そこで再び、世界から信頼され尊敬される日本になるべきだと考えたのです。

そのために、今日私たち一人ひとりがこのように行動すれば、10年後の我が国はこうなれる、という提言を、政・財・官のみならず、芸術、スポーツやNGOなども含めたさまざまな分野で活躍する塾員からいただければ、連合三田会大会の意義はさらに深まるのではないかと。そう考えた結果の出版事業なのです。安西 素晴らしい企画だと思います。ぜひ良いものにしていただければと思いますし、私も微力ながら寄稿させていただきます。

この本は、今の塾生、また広く世の若い人達にぜひ読んでもらいたい。自分たちが30歳位になったときには、こんな日本にできるかもしれないと感じてもらいたい。優れた先輩たちの提言に耳を傾けて、それによって一人ひとりが創造力を掻き立て自身の夢を育んでくれば、と願っています。

ー次世代への提言、連合三田会としての大きな役割の一つですね。

安西 10年後の日本には、多くの体験と確固たる知識を持ち、どんな人ともコミュニケーションを取ることができ

る若者がもっと増えていることを期待するものですが、すでに慶應義塾はそういう人間を輩出しているのです。これからも、そうした若い世代が世界中で活躍し、あるいは希望に溢れた家庭を築き、新しい日本を創っていつてくれることでしょう。私は教育面から、このような方向へと導いていきたいと思っています。

日本全体で受け止めるべき 150年の歴史

ーそれにしても、150年という歴史は他の大学にはないものですね。「150」というインパクトはかなりあります。

植村 150年を機にもう一回福澤論吉精神を、という意気は、慶應義塾の規模を超えて成したいものです。換言すれば慶應の150年というのは、慶應義塾という学塾や私たちだけが祝う節目ではなく、ある意味で我が国全体で受け止めるべきものとさえ思っています。安西 その通りです。日本の近代化を切り拓いてきた原動力は、義塾だけのものではなく、これからの日本と世界が持つていくべきものです。

よく山脈に例えられますが、150年の歴史の中で慶應義塾が培ってきた人脈は実に偉大です。国の政策に抗してでも理念と信念と勇気を発揮してこられた方々をたくさん輩出し、それが国の原動力となってきました。この歴史は、慶應義塾が国を先導してきたのだという誇りを改めて実感させてくれます。これからも日本と世界が必要とする慶應義塾であり続けたいと思います。

（了）

※1：「オープン＆オーバル」とは、広く社会に向かって開かれた（オープンな）学塾であると同時に、揺るぎない信念を持った「独立」と社会とともに生きる「協生」という二つの軸を併せ持つ、楕円的（オーバル）世界観を標榜する学塾であるべき、との塾長の考えを表わしたコンセプトワードです。

※2：記念出版される書籍は、一般の書店でも販売されますが、大会当日、日吉キャンパス会場内でも特別価格で販売しています。ふるってお買い求めください（詳しい内容については、P.10の記念出版についてのページをご覧ください）。

